

復興へ長い道のり実感

学生ボランティア

岩手・大槌に派遣

東日本大震災の発生から11日で4年半を迎える。岡山経済同友会は国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の仲介により、今夏も8月22〜24日に県内の大学生らによる復興支援ボランティアを岩手県大槌町へ派遣した。同ボランティアは5回目の今回でいったん終了となる。この間、町は何が変わり、何が変わっていないのか。同行取材で見た現地の「今」を報告する。(水野雅文)

「ここに町があったなんて信じられない。以前の風景を思うと復興はまだまだ遠い」。大槌町中心部を一望できる城山公園。就実大2年の大岩賢一郎さん(20)は眼下の風景に言葉を失った。

「がれきは片付いているものの、一面ほぼ更地の状態。新たな町の土台を造るため、土地のかさ上げ工事が進められている。同町は震災で高さ約14分の



城山公園から見下ろした大槌町中心部。今なお更地が広がる



カキの水揚げ作業を手伝う学生ボランティア。被災者の言葉に復興への力を感じた

に津波の爪痕を見た。町を走っていた道路の一部だろう。アスファルトの塊が至る所に埋まっていた。廃家電、食器、さびた車のナンバープレート…。平穏な生活が一瞬で流し去られたことがうかがえた。

川崎医療福祉大1年の中本千晴さん(18)は「建設業の人手不足で復興が鈍っていると聞く。発生から4年以上たっても、震災の跡はこんなに残っているのにとつぶやいた。前日夜には、宿舎で20代の被災者3人から震災の様子を聞いた。

被災者の力強さも 海岸清掃や水揚げ作業

「あちこちの倒壊した家屋のそばで助けを求める声が聞こえた。私たちの経験を無駄にしないで、普段から災害の際に生き延びる方法を考えてほしい」

環太平洋大3年の越智亜斗夢さん(20)は「組合の人の『立ち止まってはいけない』という言葉が印象的だった。少しずつでも確実に復興は進んでいくと感じた」と話した。

確実に進む

被災者の力強さも垣間見ることができた。22日に訪れた同町安渡地区の漁港。震災で船や作業小屋は壊滅的な被害を受け、新おおつち漁協は組合員が約860人から300人に激減したが、懸命に立ち上がった。期待した。

もなる。学んだことを岡山で広めるのもボランティアの役目」。被災地を心に焼き付け、震災を忘れないことが何より大切なのだと気付かされた。

▽…「家族や友人と災害が起きたときの行動を話し合おう」「風化を防ぐため、被災地の情報を発信する活動はできないか」。帰りのバスの中、意見を交わす学生たちを心強く感じた。5回に及んだ同友会のボランティア派遣は一区切りとなるが、被災地への思いはつないでいきたい。(水野雅文)

被災地への思いつなぐ

▽…4年半を経た被災地を見て、学生ボランティアたちは多くのことを感じ取ったことだろう。自分たちに何ができるか、悩みが深まったかもしれない。岡山大4年の金城奈々恵さん(23)は「被災地とどう向き合うべきか考えたい」と話していたが、答えは見つかっただろうか。

▼…一つのヒントを与えてくれたのは、被災体験を話してくれた渡辺さんだった。「私たちが重ねた失敗や苦労は、皆さんの見本に

取材メモ